

東大寺諷誦文稿注釈〔一〕

——1行、40行——

小林 真由美

一

『東大寺諷誦文稿』は、平安初期の写本『華嚴文義要決』の紙背に記された文書である。昭和十三年七月四日附で『紙本墨書華嚴文義要決巻第一 一卷 紙背に東大寺諷誦文章本アリ』と題して国宝に指定された。昭和十四年に、所蔵者の佐藤達次郎氏により、表と裏を一巻ずつ計二巻の卷子本としてコロタイプ版の複製が刊行されたが、昭和二十年四月十四日に戦災で焼失した。

昭和十四年刊複製本の山田孝雄の解説（昭和十四年五月付）によると、昭和十二年に田山信郎より文部省国宝調査室で保管中の本書を紹介され、佐藤男爵家の庫中から出たものであったことを知ったという。佐藤男爵家の

所蔵以前の来歴は不明だが、『華嚴文義要決』の巻末に「信」の朱印があり、その印は、小川睦之輔所蔵の『華嚴音義（新訳華嚴経音義私記）』と同じで、東大寺所蔵華嚴関係の古書に存するものである。また、首尾に「古経堂蔵」「徹定珍藏」の朱印があるため、もとは、鶯飼徹定所蔵であったことが知られる。楮紙十八枚を継ぎ合わせた卷子本で、縦八寸八分、全長二十九尺八寸二分であったという。

戦後、『東大寺諷誦文稿』の影印が、中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』（初版昭和四十四年、勉誠社、改訂新版昭和五十四年、風間書房）、『勉誠社文庫12 東大寺諷誦文稿』（中田祝夫解説、昭和五十一年、勉誠社）、築島裕『東大寺諷誦文稿総索引』（平成十三年、汲古書院）に掲載して刊行されたが、すべて、昭和十四年刊の複製本を撮影したものである。

『東大寺諷誦文稿』は、三九五行からなる文章である。⁽¹⁾法会等で朗読する文章の原稿や覚え書きのようであるが、⁽²⁾整った文章ではなく、省略が多く、単語の羅列だけの箇所もある。法相宗関係の用語が多いため、筆者は法相宗に關係する人物であったと推測される。⁽³⁾漢字片仮名交じり文で表記され、ヨコト点を加えた部分もある（80行（122行）。漢字片仮名交じり文の一書として、現存最古のものである。コの上代特殊仮名遣いの二類の区別が見られ、弘仁二年（八一―）に漢訳され『心地観経』の翻案と見られる文がみられることから、弘仁年間以後天長年間頃の成立と推測される。⁽⁴⁾

注

(1) 行数は、築島裕『東大寺諷誦文稿総索引』（平成十三年、汲古書院）による。

(2) 藤本誠氏は、本書が、執筆当初は、父母追善の法華八講のために作成された手控えであったことを推論している。
〔『東大寺諷誦文稿』の成立過程〕、『水門―言葉と歴史―』23、二〇一一年七月

(3) 中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』（初版昭和四十四年、勉誠社、改訂新版昭和五十四年、風間書房）
第一章参照。

(4) 亀井孝「東大寺諷誦文稿の「コ」の假字について」〔『文学』昭和二十一年四月〕、拙稿「東大寺諷誦文稿の成立年代について」〔『国語国文』第六十卷第九号、平成三年九月〕参照。

凡例

【影印】

昭和十四年刊複製本を撮影した。上部に行番号を記した。行番号は、『東大寺諷誦文稿総索引』による。（中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』の201行を200行への補入として数えているため、201行から、中田書よりも1行少ない行数になっている。）

【翻刻】

翻字は、築島裕『東大寺諷誦文稿総索引』の本文翻刻に準拠する。但し旧字体・異体字・略字は原則的に現行の新字体にあらためた。あらためなかった漢字は、「无」「寶」「玠」「尔」「且（壇）」「并（菩薩）」である。片仮

名の上代特殊仮名遣い甲類のコは古、乙類のコは己、ア行のエは「衣」、ヤ行のエは「エ」と表記した。

字体による相違以外で、築島裕『東大寺諷誦文稿総索引』の翻刻と相違する文字は、次の通りである。(28行「恐」以外は、中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』の翻刻にもとづく。)

9行 □ ↓ 議

□ ↓ 利

13行 容 ↓ 欲

15行 晝 ↓ 豈

28行 怨 ↓ 恐

□ || 欠損や擦消などにより解説不能の文字

〔 〕 || 解説困難または解説不能だが、先行書の解説によって挿入する文字

┌ || 章段の文頭を示すと思われる鉤点

□ || 廓(囲み線)で抹消された文字

翻刻の行頭の数字は、行番号を示す。

○内の算用数字は、本文に引かれた連絡線に付けた番号である。↓は連絡線の始点を、↑は連絡線の終点を示す。(① ↓ ↑ ①が一本の連絡線になる)

三碑
 此通之轉也至官而增之 阿林迦樹文人夢歸羊出稿獨
 西草水尚然 况半結之 之齊願大悲月現 永生心提水中 如畫之
 鏡中像 根如不數摩尼珠 時星而現 漢那帝之 結
 動者不觀輪王冠者不信者不識仙金驅 亦和玉毛 山徑時不實 迦樓
 不照而為 凍水出之所亦 後凍水出 喜根之 頂上
 自有毛 起信心
 中自來相 貴 麟 朝 地 味 而 色
 金邊而不知 凡已 財 不知
 只亦如 地 堪人 十六元 盡 入 一

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11

是亦如... 堪人又... 入一...
 度交... 信身親... 以身礼... 是名九...
 世間... 獵師... 大...
 斷... 及... 春... 仙... 未...
 年... 世... 罪... 善... 人...
 是... 人... 夫... 人... 死... 人...

31

吾奉此花飛十方作仙土之莊嚴 合今中 奉此香烟 淨三千作信之使父母

32

所生之主尔文 雨合雨天乃衣色花天乃供養散乃之 翻化十二五 瓔珞衣百味供養云

33

為且至過先考先妣去南親丁 羅縻三途八難 于今經迴者 合蒙獻華之十種功德

34

奉香之十箇勝利 天上寶聚自坐集 為且先考先妣 于今歷旋患蒙者忍念解脫

35

合性某淨土作某仙資 推為并衆 元暇樂合受七寶殿果殿花殿臺上作三身仙云

36

○所設上香大柳供養花大柳供養燈大柳供養種大柳供養 鈔如來之境果

37

所受收却元トアオト 慈悲衆生界心故 垂哀納受悲

38

麻綱仙人於道時尔文 七莖之蓮花云奉燈燈云花天女丁 終法時尔文 三教金錢云獻

39

毗波尸仙 以是今日呈

40

某仙之平等大悲文 不尚貴卑云 宿寶王樹云 沙羅樹云

【翻刻】（1〜7行）

1 □言辭

2 〔葵藿〕ハ隨日而轉 芭蕉因雷而增長 阿叔迦樹 女人摩触華出 橘得〔尸菓則〕滋〔多〕

3 〔无〕心草木尚然 況乎諸仏如来之本願大悲月現衆生心想水中 如虚谷之

4 〔響如〕鏡中像^之 復如天鼓摩尼珠 但周歲 〔時星而現 漢明帝之時夢而現^代〕

5 〔盲〕者不覲輪王瑤冠 不信者不瞻仏金軀 卞和カ玉モ不值時ニ不寶 加悛ノ説^法モ

6 不器而同瓦礫〔二ハ〕凍水シミツ出シ所ニナモ後モ凍水ハ出ル 善根之〔手〕^{タナスエ置スエ}

7 □□モ有テモ起信心

【読み下し文】（1〜7行）

□言辭

〔葵藿〕ハ、日ニ隨ヒテ轉ジ、芭蕉ハ、雷ニ因リテ增長ス。阿叔迦樹ハ、女人ノ摩^ナテ触ルルトキニ華出ヅ。橘ハ、尸ヲ得テ〔菓則チ〕滋〔多〕シ。心无キ草木スラ、尚シ然ナリ。況^{イハムヤ}乎、諸仏如来ノ本願大悲ノ月ハ、衆生ノ心想ノ水ノ中ニ現レム。虚谷ノ〔響〕ノ如シ。鏡中ノ像ノ〔如〕シ。復、天鼓・摩尼珠ノ如シ。但シ周ノ歲〔時〕ニ、星ニシテ現ハル。漢ノ明帝ノ時〔代〕ニ、夢ニシテ現ハル。

〔盲〕者ハ、輪王ノ瑤冠ヲ覲ズ。不信ノ者ハ、仏ノ金軀ヲ覲ズ。卞和ガ玉モ、時ニ値ハズシテハ、寶ニアラズ。加陵ノ〔法〕説モ、器ニアラズシテハ、瓦礫〔二ハ〕同ジ。凍水出^{シミツ}デシ所ニナモ、後モ凍水ハ出ル。善根ノ

タナスエ
〔手〕ヲ置エ、□□モ有リテモ、信心ヲ起セ。

【解説】（1～7行）

原本は1～26行まで擦消されており、損傷も多く、解説困難な箇所が散在している。

1～7行の文章は、さまざまな感応（機縁に応じて互いに触れずして通じ合うこと）の事例をあげながら、仏と衆生の「感応道交」を説き、信心を起すことをすすめている。

【文意】（1～7行）

〔葵藿〕は日に随つて転じ、芭蕉は雷によつて成長する。阿叔迦樹は、女人が撫で触る時に蓮華の花を生じた。橘は屍の榮養を得て果実の滋味を多くする。このように、心のない草木でさえ、刺激に応じて感応する。まして仏が衆生の機縁に感応するのは当然のことで、その感応道交の様子は、仏の月が衆生の心の水に映し出されるようであり、谷に響く声、鏡に映る像などのようである。但し、この世に釈迦が誕生するときに実際に星が現れ、漢の明帝の夢に仏が現れることもあった。盲者が転輪聖王の宝冠を見ることができないように、信心のない者には、仏の姿を見ることができない。下和の玉も時代に合わなければ宝にならず、迦陵頻伽の美しい声も聞く耳がなければ瓦礫同然である。清水が湧くところには絶えることがなく清水が湧き続ける。そのように善根を植え、（欠字）信心を起こしなさい。

【語注】（1〜7行）

2 葵藿 ひまわり。または、蔬菜の葵（フユアオイ）と藿（大豆の葉）。葵藿は太陽に向かって傾くといわれ、君主への仰敬に譬えられることが多く、『萬葉集』の吉田宜の書簡にもみられる。

宜が主に恋ふる誠、誠は犬馬に逾え、徳を仰ぐ心、心は葵藿に同じ。

（『萬葉集』巻第五、八六四前書簡）

2 芭蕉 バシヨウ科バシヨウ属の大型多年草で、茎に見える部分が、葉が巻いて茎のようになる「偽茎」のため、茎に芯がないように見える。そのため、仏典では実体のないものの例として比喩に使われる。維摩十喻など。「雷ニ因リテ増長ス」の出典は未見。

2 阿叔迦樹 阿輪迦樹、無憂樹ともいう。仏伝によると、釈尊の母・摩耶夫人が臨月に、阿叔迦樹の花を摘もうとして右手を挙げると、右脇から釈尊が生まれ出た。その時、樹の下に大きな七宝の蓮の花が生じて、釈尊はその上に堕ちたという。

夫人、彼の園中に、一大樹の、名づけて、無憂と曰ふ有るを見る。花色香鮮に、枝葉分布して、極めて茂盛を為す。即ち右手を挙げて、之を牽きて摘まんと欲するや、菩薩、漸々に右脇より出づ。時に、樹下に、亦、七宝の七茎の蓮華を生ず。大きき車輪の如し。菩薩、即便、蓮華の上に堕し、扶持する者なくて、自ら行くこと、七歩し、其の右手を挙げて、師子吼す。

（『過去現在因果経』巻第二）

2 橘ハ、口ヲ得テ 原本の損傷と擦消のため判読困難な箇所だが、築島裕氏が『大般涅槃経』に拠って「橘ハ屍

ヲ得テ菓滋ク多シ」と補読した。(築島裕「〔書評〕中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』」、「国語学」第八十三集、一九七〇年十二月)

3 心无キ草木 仏典で、草木は心のないもの(無情、非情)の代表的事物とされる。

3 本願 衆生救済の仏菩薩の誓願。

3 大悲 大いなる慈悲心。

3 水ノ中ニ現ル 水中の月は、依他十喻の一つの水月の喩えとして仏典に散見する。依他十喩とは、依他起生(因縁和合によつて生じ、因縁がなくなると消滅するもの)が実体のないものであることを譬えたもので、幻・陽焰・夢・水月・響・空華・像・光影・變化事・尋香城の十種(『大般若経』卷第一)である。ここでは仏と衆生の感応道交のさまを、天上の月が地上の水に現することに譬えており、天台宗の教義書である『法華玄義』による表現と思われる。56行にも類似的表現が見られる。(拙稿「水の中の月―『東大寺諷誦文稿』における天台教学の受容―」、「成城国文学論集」第三十五集、二〇一三年三月参照)。

水も上升せず月も下降せずして、一月、一時に普く衆水に現ず。諸仏も来らず、衆生も往かず。慈善根の力、此の如きの事を見る、故に感応妙と名づく。

〔『法華玄義』第二上〕

一月降らず、百水升らずして、河の短長に随ひ、器の規矩に任せて、前無く後無く一時に普く現ずるが如し。此は是れ不思議の妙応なり。

〔『法華玄義』第六上〕

3 虚谷ノ〔響〕 実体がなく縁によつて現れる現象として、前項の依他十喩や十縁生句の一つに数えられる。ここでは、仏と衆生の感応に譬えている。

4 鏡中ノ像 前項・前々項に同じく、依他十喩、十縁生句の一つだが、ここでは、仏と衆生の感応に譬えている。『法華玄義』にも感応の喩えとして説かれている。

明鏡の表裏清澈して、一像千像簡括する所無く、功力を須ひず、任運に像似するが如し。

〔『法華玄義』第六上〕

4 天鼓 切利天の善法堂にあるという、打つ者なくして、自然に鳴る鼓。253行にも再出する。

4 摩尼珠 宝珠。転輪聖王の七宝の一つ。自然に光明を発する珠。253行にも再出する。

4 周ノ歲時ニ「時」は、廓を施して抹消されている。推敲の跡か。积尊誕生（紀元前五世紀頃）は、中国の周代にあたる。仏伝によると、明星の出る時に积尊の神（魂）が母の摩耶夫人に降胎したという。

護明菩薩は天人金団に謂つて曰く「往昔の補処の菩薩の託生の家は、六十種の功德を具し、三代清浄なるべし。汝は閻浮に下つて我が為に觀察せよ」と。云々。周。昭王元年。

〔『仏祖統紀』卷第二〕。

大光明を放ちて、普く十方を照し、四月八日の明星の出る時を以て、神を母胎に降す。

〔『過去現在因果経』卷第一〕

4 漢ノ明帝ノ時（代）〔明帝ノ時〕は廓を施して抹消されている。漢の明帝の夢に金人（仏）が現れたことを、

仏教の中国初伝とする伝説による。

世に伝らく、明帝夢に金人の長大なるを見る。頂に光明有り。以て群臣に問ふ。或の曰く、西方に神有り、名を仏と曰ふ。

〔後漢書〕 卷第七十八、西域伝

5 輪王ノ瑤冠 転輪聖王の宝冠。転輪聖王は、天から宝の輪を授けられ、正義をもって全世界を統治するという帝王。

5 仏ノ金軀 仏の金色の身体。仏の三十二相の中に、身金色相があり、皮膚がなめらかで金色に輝いているという。

5 卞和ガ玉 卞和は、周、楚の人。玉璞（掘り出したまま磨いていない玉）を厲王に献じたが、詐とされて左足を切られ、武王に献じてまた右足を切られ、文王の時にやっと宝玉であることを分かってもらったという（『蒙求』巻第二など）。

5 寶 原文に「玠」と「寶」が使用されているが、単なる異体字の関係ではなく、書き分けの意識がみられる。「三寶」は「三珠」とは書かない、など（中田書釈文注記参照）。

5 加憐 迦陵頻伽。美声の鳥。極楽浄土に住む鳥といわれる。

6 凍水 清水。清らかな湧水。

6 出シ所ニナモ 「ナモ」は、係助詞「ナム」の上代語。『東大寺諷誦文稿』では359行と二回使用されていて、「ナム」の使用はない。

6 善根 善報のもとになる善い行い。

6 手 手の先、または指先。「手子タナスエ」(観智院本「類聚名義抄」仏下本)

【翻刻】(8行～15行)

8 富カ中ニ貧ハ自所招貴カ中ニ賤ハ〔自所〕 餽カサ 朝々抱カ、ヘテ膝ヲ而念^{有ヘシ貧}ヘトモ

9 □□□□無〔ナカラ〕人ハ福田^{可加}タタ^柯ケト^{ケト} 〔議〕 頰ツラ 嘆ケトモ都无〔利〕モ①↓

10 〔臨淵而羨〕魚退而不知造ス〔カ〕ムニハ網ヲ 无己財ハ徒〔敷〕 鄰財ヲ 不如替〔カ〕ヘテ〔富〕ノ

11 〔貧〕ムサホリニ〔為〕一ノ施ヲ↑①不堪人ハ十六无尽藏ニ 入一錢②↓〔无〕クハ〔无〕者合セヨ 掌无ハク

12 香發善心 无クハ供具翹三業之礼 以身礼以口〔讚〕以意念 ↑②是名无価珠ト 諸仏

13 □□讚③↓ 世間ニ有〔欲〕□□□時 〔蒙〕小福〔利〕□□大ニ〔得財〕大福 大ニ〔農〕時

14 農夫ツクリヒト終日作而獲一日之価タカラ 獵師通夜〔覓而〕^{イトナ} 得少〔之〕物□□

15 金尚費精神碎屈筋〔ヲ〕矧大ニ所欣^欲ネカヒシ蒙大祚人 〔豈〕法廷ニ不朽斧柄^{オノ、エ}

【読み下し文】(8～15行)

富メルガ中ニ貧シキハ、自ラ招ク所ナリ。貴キガ中ニ賤シキハ、〔自〕ラ餽ル〔所〕ナリ。朝々膝ヲ抱ヘテ念ヘドモ、(貧シクモ有ルベシ)。

□□□□無〔カラム〕人ハ、福田ニ加フ可キ〔財物〕ヲ入レヨ。(タタ〔柯〕嗟ケドモ)、頰ヲ〔議キテ〕嘆ケドモ、都テ〔利〕モ无シ。①↓

〔淵臨ミテ〕魚ヲ〔羨〕マムヨリハ、退キテ網ヲ造カムニハ如カジト（云フガ如シ）。己ガ財无クハ、隣ノ財ヲ〔數ヘム〕従リハ、〔富〕ノ〔貪リ〕ニ替ヘテ、一ノ施ヲ〔為ルニ〕如カズ。

↑①堪ヘ〔ザラム〕人ハ、十六无尽藏（八万ル□物）ニ一錢ヲ入レヨ。〔无〕クバ、（一錢〔无〕キ人ハ）『无者』掌ヲ合セヨ。香无クバ、苦心ヲ発セ。□□、供具无クバ三業ノ礼ヲ翹テヨ（クハダ）。身ヲ以テ礼セヨ。□ヲ以テ讚ゼヨ。意ヲ以テ念ゼヨ。（供具ヲ為スコト〔无〕クバ、仏法僧ヲ礼拜セヨ。）

②↓是レヲ无価珠ト名ヅク。諸仏□讚③↓世間ニ〔欲〕□□□有ル時ニハ、小シキナル福〔利〕ヲ蒙リ、大キニ〔財ヲ得〕レバ、大キナル福アリ。『大キニ』

〔農〕時ニ農ツクリヒト夫ノ終日ニ作りテ一日ノ価ヲ獲ヒネモス。獵師ノ通夜ニ〔覓〕イハムミテ、少シキヨモスメ（聊カナル）物ノ□□ヲ得。金ハ、尚シ精神ヲ費シ、筋〔ヲ〕屈ミ碎キヌ。矧ヤ、大キニ大キナル祚を蒙ラムト欣ヒシイハム（欲ヒシ）人ハ、〔豈〕ニ法ノ庭ニ斧ノ柄、朽チザラメヤ。

【解説】（8～15行）

布施と礼拝のすすめ。現在の貧しさは前世の報いなので嘆いてもしようがない。福を得るためには、根氣よく布施をせよ、それがかなわなければ三業供養（身口意の礼拝）をせよと説いている。

【文意】（8行～15行）

富める者の中の貧しさは、自らが招いた報いであり、高貴な者の中の賤しさは、自らが飾り奢った報いである。

毎朝膝を抱えて嘆いても、貧しさは変わらないだろう。(毎夕嘆いても)、頬づえを突いて嘆いても、何の利益もない。①↓

「淵から魚をのぞいて羨んでいるよりも、淵から退いて網を作れ」という故事のように、自分に財がなければ、隣の財を数えて羨むのではなく、富の貪りに替えて、自分の持てる財を布施せよ。財無きものは、十六無尽蔵に一銭でも寄進せよ。一銭も無き者は、ただ合掌せよ。奉る香がなければ、菩提心をおこせ。供具がなければ、三業(身口意)の礼をつとめよ。身を以て礼せよ。口を以て讃げよ。意を以て念ぜよ。供具を奉ることができなければ、仏法僧を礼拝せよ。

②↓これを無価珠と名づく。諸仏(欠字)讃。

③↓世間に(欠字)有る時には少しの福を受け、大きな財を得ることができた時には、大きな福を受ける。農期に農夫が終日働いて、やっと一日分の収穫を得る。獵師が夜通し働いて、やっと少しの獲物を得る。金を得るにはさらに、精神を費やし肉体の筋を砕く。大きな福利を得ようと願った人は、斧の柄が朽ちるほどの長い時間がかかったのではないだろうか。

【語注】(8行)15行)

8 飭ル 『東大寺諷誦文稿』ではほかに、「嚴」「莊」「飾」に「カサル」の訓がある。「嚴カサ」(86行)、「莊カサカシツ」(294行)、「作ツクロ飾カサハナリ」(315行)。

8 膝ヲ抱ヘテ 膝を抱えるのは、憂いや歎きのしぐさ。

繩牀を纏負すれば、獄の傍の盜士も膝を抱いて仰いで歎く。

（『三教指帰』巻下）

9 福田 幸福を生み出す田の意。信仰し供養することによって、福德をもたらしてくれるものことで、仏や僧侶などをさす。

9 「柯」 解説が困難な文字。中田書は「揃へテ」とし、『総索引』讀下し文「注」に、「柯——存疑。「サ、ヘテ」などと訓すべき字か。」とある。

9 都テ「利」モ无シ 副詞「かつて」は、下に打消の語を伴い、強い否定を現す。『東大寺諷誦文稿』「都」は九カッ例、すべて「无」「不」「未」を伴って使用されている。『訓点語辞典』（東京堂出版）によると、「かつて」打消の表現は、奈良時代から認められる表現で、平安時代には専ら訓点資料に認められるという。

10 「淵ニ臨ミテ」 中田書の補読。「臨淵羨魚」は、羨むだけでは、欲しいものが手に入らないという故事。「古人有言、臨淵羨魚、不如退而結網。」（『漢書』卷第五十六、董仲舒伝）。

11 十六无尺蔵 十六は大数。無尺蔵は、尽きることのない財宝を有する蔵。

12 苦心「提」の脱字。菩提心。悟りを求める心。

12 三業ノ礼ヲ翹テヨ 三業は身・口・意。「三業供養をつとめよ」の意。法相宗の教義書『法華文句』に、「供養とは、通じては三業皆供養なり」（卷第二下）と説かれている。「翹」は、つまだつ、思い立つ、つとめるの意。観智院本『類聚名義抄』に「翹クハタツ」（僧上）とある。

12 無価珠 値がつけられないほど貴重な宝。

14 農夫ツクリヒト 「ツクリヒト」の訓は、仮名書の孤例。興福寺本『日本靈異記』には「農夫」に「多都久留乎乃去（タ

ツクルヲノコ）」（上巻第五縁）の訓釈がある。

15 大キナル祚 大きなさいわい。観智院本『類聚名義抄』に「祚サイハヒヤスシムク」（法下）の和訓がある。

15 斧ノ柄、朽チザラメヤ。斧の柄が朽ちるほどの長期間のことをいう。中田書出典調査参照。「斧の柯を視れば、爛尽す。既に帰る、復時人無し」（『述異記』巻上）

【翻刻】（16～17行）

16 波斯匿王及眷属衆之避法席時ト、メ給ケリ 法華会五千輩之退坐時マカリシ 仏不

17 〔止ト〕、メ給

【読み下し文】（16～17行）

〔波〕 斯匿王ト眷属衆ノ、法ノ席ヲ避ケシ時ニハ、仏トド、制止メ給ヒタリ。法華会ニ五千ノ輩ノ、（法ノ）坐ヲ退マカリシ時ニハ仏〔止トド〕メ給ハザリキ。

【文意】（16～17行）

波斯匿王と眷属衆が法会を退席する時には、仏は制止された。法華会で五千人が退席しようとするときには、仏は制止されなかった。

【語注】（16～17行）

16 波斯匿王 釈迦と同時代の中インド舎衛国の王。釈迦仏と同日に生まれ、成道の同日に即位したとされる。釈迦教団の保護者。

16 眷属衆 従者たちのこと。

16 法ノ席ヲ避ケシ時ニハ 原文「避法」は、何らかの文字を消して、その横に書いた文字。

16 制止メ給ヒタリ その場から去らないようにお止めになった。波斯匿王退坐の伝説は出典未見。

16 法華会ニ五千ノ輩ノ法ノ坐ヲ退リシ時ニハ 『法華経』に、いまだ悟っていないのに悟ったと思いがった者

五千人が説法の坐を退席したが、私は制止されなかったとある。

この語を説きたまふ時、会の中に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の五千人等ありて、即ち坐より起ちて仏を礼して退けり。所以はいかん。この輩は、罪の根深重にして、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂い、未だ証せざるを証せりと謂へり。かくの如き失あり。ここをもちて住せざるなり。世尊は默然として制止したまはず。

（『法華経』卷第一、方便品）

【翻刻】（18～19行）

18 ↑③一年三百六十日 此中一日修法 一百〔衆无〕造罪 以一日善滅百日罪 人間飢渴之苦スラ

19 甚劇 矧餓鬼飢渴苦 人間囹圄甚畏 矧地獄 之囹

【読み下し文】（18～19行）

↑③一年ニハ三百六十日アリ。此ノ中ノ一日ノ修法ハ、一百ノ〔衆〕、罪ヲ造ルコト〔无シ〕。一日ノ善ヲ以テ、百日ノ罪ヲ滅ス。人間ノ飢渴ノ苦スラ甚ダ劇シ^{ハゲ}。矧ヤ、餓鬼ノ飢渴ノ苦ハ。人間ノ圜圍ハ甚タ畏シ。矧ヤ、地獄ノ圜ハ。

【解説】（18～19行）

修法と善行のすすめ。

【文意】

↑③一年には三六十日ある。その中のたった一日の修法によって百人が罪を造ることがなくなり、一日の善をもつて百日の罪を滅すことができる。人間の飢え渴きの苦でさえ甚だ劇しい。況や、餓鬼の飢渴の苦の劇しさは。人間の牢獄は甚だ恐ろしい。況や、地獄の牢獄の恐ろしさは。

【語注】

19 餓鬼 餓鬼道の衆生。餓鬼道は、衆生が輪廻する六つの世界（六道）の一つ。飢えと渴きに苦しみ続ける世界。

19 圜圍 牢獄。

19 地獄ノ圜 「地獄」は地下にある牢獄の意で、生前の罪がもつとも重い者が行くところ。六道（前項参照）の

【翻刻】(20〜26行)

- 20 〔見〕トモ幼 人之老而未老人見 幼作 聞トモ生イケル人之死ヲハ未聞死人之反生蘭
- 21 殿之上多別 少会 青松之下有哀耳 无楽 夜鼓屢鳴日影易傾 前ユクサキノ
- 22 〔生〕不〔与〕(資料未半) 春蘭ニハ麗華无楽情而独咲是則成実将榮之状秋野□虫不流
- 23 涙而空鳴 □□是則 散葉オチ将衰之像 紅容黒髪不覩老躰 壮年彩儀无曲形カ、マレル
- 24 ④↓聊〔物〕一〔種〕モ □□□ 不従閻魔之城 少因 少善ニツ↑④ 作泥梨之粮
- 25 班超カ往シハ天竺ニ 戴雪而反家 蘇武カ行胡地ユキシハニ皓首而来国 逕年テモ月ヲ而有シ
- 26 有レハ亦モ相見ツ 无常之別ハ経テモ日〔月〕ヲ片時無相見談可

【読み下し文】(20〜26行)

幼キ人ノ老ユルヲバ(見レドモ)、老イタル人ノ幼クナ(作レルヲ)見ズ。生ケル人ノ死ヌルヲバ聞ケドモ、死ニシ人ノ反リテ生クルヲ聞カズ。

蘭殿ノ上ニハ別ルルコト多クシテ、会フコト少シ。(青)松ノ下ニハ哀シビ(ノミ)有リテ、楽シビ无シ。夜ノ鼓、屢鳴リテ、日ノ影傾キ易シ。ユクサキノ前ノ〔生〕ニ〔未〕ダ与ラズ(資糧未半?)

春ノ蘭ニハ、麗シキ華、楽情无クシテ獨リ咲ク。是レ則チ、実ト成リ榮エムトスル状ナリ。秋ノ野ニハ、虫、涙

ヲ流サズシテ空シク鳴ク。(是レ則チ)、葉散チテ、衰ヘムトスル像ナリ。紅ノ容、黒キ髪ハ老体ニ觀ズ。壮年ノ彩儀ニハ曲カカマレル形无シ。

④ ↓聊ナル〔物〕、一ノ〔種〕モ□□□閻魔ノ城ニ從ハズ。少因、少善已ソ↑④泥梨ノ粮ト作ラム。

班超ガ天竺ニ往キシハ、雪ヲ戴キテ家ニ反リキ。蘇武ガ胡地ニ行キシハ、首ヲ皓クシテ国ニ来リキ。年月ヲ逕テモ有リシ有レバ、亦モ相ヒ見ツ。无常ノ別レハ、日月ヲ経テモ、片時モ相ヒ見テ談ラフ可キコト無シ。

【解説】

無常の理と死の永遠の別れについて説いている。対句で構成された修辭的な文章。

【文意】(20～26行)

幼い者が老いることはあつても、老人が幼く若返るのは見たことがない。生きている人が死ぬことはあつても、死んだ者が生き返つたとは聞いたことがない。人も自然も老や死を免れ得ず、無常の別れは永遠である。蘭殿の上に別れは多く、会うことは少ない。青松の下で悲しみは多く、楽しみは少ない。夜を知らせる鼓はしばしば鳴り、日の影は傾きやすい。先の世のことはまだ何もわからない。春の園には、麗しい花が、自ら楽しむ感情なく独り咲く。これはつまり、やがて花が実となり繁榮していくための現象である。秋の野の虫は涙を流すことなく鳴く。これはつまり、やがて冬になり葉が落ちて衰退していくための現象である。紅顔と黒髪は老体に見ることはない。壮年の立派な姿に腰が曲がつた様子はない。

④↓聊かの物、一つの〔種〕も（欠字）閻魔王の城には持つていけず、少因少善こそが↑④地獄行きの糧になる。

班超は天竺に行ったが老年になって帰還し、蘇武も胡地に行ったが年老いて帰国した。生きてこそいけば、年月が経ってもまた会うことができるだろう。しかし、死の無常の別れの場合は、いくら年月が経っても再び会って語らうことはできないのである。

【語注】（20～26行）

20 蘭殿 豪華な部屋。特に後の寢室を言う。

21 (青) 松 墓のこと。山上憶良の文にも「青松」の例がある。

隴上の青松は、空しく信劍を懸け、野中の白楊は、但悲風に吹かるのみ。

（山上憶良「悲歎俗道仮合即離易去難留詩一首并序」、『萬葉集』巻第五）

21 前ノ〔生〕 「前ユクサキノ」との仮名書きがあるので、「前世」ではなく、生まれ変わる先の生（来世）のこと。

74 行にも、「前ユクサ塗モ」とある。

22 未ダ与ラス 行頭が欠損と擦消のため解説が困難で諸説にわかれている。「□未與」（田山釈文）、「□未契^{不?}」（中

田書）、「一生『未』与」（『総索引』）。この文章は無常について述べているので、『総索引』に従い、「死後に生

まれ変わる世のことはわからない」の意にとり、「前の生に与^{アスカ}らず」とする。

21 散チテ 「散オチ」。落葉のこと。散華の意の「散」を32行では「散チラシテ」と訓んでいる。

23 曲レル形 腰の曲がった姿。「曲カカマル」（観智院本『類聚名義抄』僧下）。

24 閻魔ノ城 閻魔王の宮殿。閻魔王は、死後の世界の支配者で、亡者の罪を裁く。

24 泥梨ノ粮 泥梨は「地獄 (niraya)」の音写語。少因少善は地獄行きの旅の食糧になる。つまり、善因が少な
いと、死後に地獄行きになるということ。

25 班超 後漢、安陵の人。明章両帝の時、西域を征して歴官し、三十一年後、老年になって帰還した。

25 雪ヲ戴キテ 白髪になって。

25 天竺 インド。原文「天竺」。141行と389行にも天竺を「天竺」と書いてある。

25 蘇武 漢、杜陵の人。漢武帝の時、匈奴に使用して、十九年間北海（バイカル湖）のほとりに幽置されたが、昭
帝が匈奴と和親して、帰還することができた。

25 胡地 北方の蛮国。

25 首ヲ皓クシテ 白髪になって。
シロ

25 有リシ 「有シ」。連用形に助詞「シ」が付く例。66行にも見られる。『東大寺諷誦文稿』にはほかに助詞「シ」
が、名詞に付く例（222行・224行二ヶ所）、助詞「ト」に付く例（60行）、助詞「ヲ」に付く例（70行）、「テシカ
モヤ」（219・220行）がみられる。

【翻刻】（27～30行）

27 六種 一昔世殖善因之人 作福德丈雄 智慧丈女ヲミ 无価珍器ニ 盛モリ盈百味供具ヲ而

28 供養三世三寶 我等ハ昔不殖善因 生五濁惡世 生老病死之恐所迫 聞

29 依報正報之不足聲 何而イカニシテカ備ソナヘ儲テ如法之供養大御 欲トモ奉三世

30 三寶某仏云某経云某并云

【読み下し文】(27〜30行)

六種

「昔世ニ善因ヲ殖エシ人、福德ノ丈雄、智慧ノ丈女ト作り、无価ノ珍器ニ百味ノ供具ヲ盛り盈テテ、三世三寶ヲ供養ス。我等ハ、昔、善因ヲ殖エズ、五濁ノ惡世ニ生ル。生老病死ノ恐レニ迫ラレ、依報正報ノ足ラヌ声ヲ聞ク。何イカニシテ而カ如法ノ(大御) 供養ヲ備ソナヘ儲ケテ、三世三寶、某仏ニ奉ラムト欲ヘドモ云。某経云。某并云。

【解説】(27〜30行)

墨書は27行からはじまる。そのため、「東大寺諷誦文(稿)」と題される前は文頭の語句をとって「昔世殖善の文」と称されていた。

標題「六種」。六種供養の際に述べる詞章か。中田祝夫氏は、「教化之文章色々」(『日本歌謡集成』)の「六種」との辞句の相似を指摘し、「平安中期以後に盛んにつくられた教化中の六種の古い姿であろう」と述べている(中田書第一章第五節)。

章段末に「某経云」「某菩薩云」とあり、經典と菩薩を限定しておらず、種々の法会に使用できるようにして

いる。

【文意】

六種
過去世に善因を植えて、福德の男と智慧の女として恵まれて生まれた者たちは、素晴らしい宝器に百味の供え物を盛り満たして、三世三宝を十分に供養することができる。しかし我等は、昔、善因を植えなかつたために、五濁の悪世に生まれた。生老病死の恐怖に迫られ、依報正報（極楽往生と成仏）を得るには足りないという声を聞くばかりである。どうにかして如法の大御供養の支度をして、三世三宝に奉りたいと願っても。某経云。某菩薩云。

【語注】（27～30行）

- 27 六種 密教で仏に供える、鬘伽・塗香・華鬘・焼香・飲食・灯明の六種供具。
- 27 福德ノ丈雄 福德に恵まれた男。次項の「ヲミナ」に合わせて「ヲノコ」と読む（中田書釈文注記参照）。
- 27 智慧ノ丈女 智慧に恵まれた女。「丈女ヲミ」の仮名書があるので、「ヲミナ」と訓む。「ヲミナ」は、若い女。
- 27 无価ノ珍器 値が付けられないほど貴重な宝器。
- 27 百味ノ供具 種々の美味なる飲食物の供え物。
- 28 五濁ノ悪世 五つのけがれ（五濁）に満ちた悪しき世。五濁は、劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁。
- 28 生老病死ノ恐レニ迫ラル 生老病死（四苦）の恐怖に迫られる。先行書では「怨」と翻刻しているが、字形と

文脈によって「恐」に改めた。

29 依報正報 正報は、過去の業の報いとして受けた身心。依報はその身心のよりどころとなる国土や器物など。

浄土教では、成仏を正報、浄土往生を依報として論じている（善導『観経疏』巻第一）。

29 何^{イカニシテ}而カ 『東大寺諷誦文稿』では、「何而」を「イカニシテカ」と訓じている。「云何^{テカ}而得人身」（339行）、

「何而成仏先発菩提心」（379行）

29 備^{ソナ}へ 95行に「具」に「ソナへ」と仮名書した例がある。

29 如法ノ大御供養 法にかなった大御供養。『諷誦文稿』で「オホミ（大御）」は名詞に付き、すべて仏に対する

敬語（中田書第二章第二節参照）。この「大御供養」と「大御恩」（177・179行）のほか、すべて仏の身体に対する敬語として使用されている。「自^{オホミ}テツカラ」（170行）「晴^{オホミ}メ」（115行）「睫^{オホミ}マナ」（115行）「臂^{オホミ}タ、」（272行）。

29 三世 過去世・現在世・未来世。

【翻刻】

31 吾奉此花 飛十方作 仏土之莊嚴 今日ケフ奉此香烟 浮三千作信ノ使⑤↓⑥↓父母カ

32 所生之土ニハ ^{令雨天ノ衣已口天ノ供養云} 雨^ム下^ム雨花ト散チラシテ云 翻化ナシテ璽^ム瑠衣百味供養云⑦↓

33 為且主過去両親 ^{先考先妣} 親^{カケホタサ} 羈縻三途八難 于今経廻者 令蒙献華之十種功德

34 奉香之十箇勝利 天上寶聚自然集↑⑦為且主先考先妣 于今歴旋患処者忽令解脱

35 令某淨土作某仏資 携并衆 无暇楽令受七寶 昇花台上殿終ツレ 作三身仏云

36 所受収都无トイフトモ 慈悲衆生界ヲ故 垂哀納受大御供養 ↑⑤所設上香花燃燈種々 約如来之境界

37 所受収都无トイフトモ 慈悲衆生界ヲ故 垂哀納受 ↑⑥

【読み下し文】(31〜37行)

吾、此ノ花ヲ奉リテ、十方ニ飛バシテ、仏土ノ莊嚴ト作サム。今日、此ノ香烟ヲ奉リ、三千ニ浮ベテ、信ノ使ト作サム。⑤ ↓ ⑥ ↓

父母ガ所生ノ土ニハ、雨ト雨フラシ、花ト散ラシテ云。(天ノ衣、天ノ供養ヲ雨フラ令メム云。) 瓔珞ノ衣ヲ翻化ナシテ、百味ノ供養云。⑦ ↓

且主ノ過去ノ両親(先考先妣)、三途八難ニ羈ケ縻サレ、今ニ經廻スル者ノ為ニ、献花ノ十種ノ功德、奉香ノ十箇ノ勝利ヲ蒙ラ令メム。天上ノ寶聚ハ自然ニ集マル。

↑⑦且主ノ先考先妣ノ為ニ。今ニ患處ヲ歴旋スル者ヲ、忽チニ解脱サセ令メ、菩薩衆ノ資携スル某仏ノ某淨土ニ(往生サセ) 令メ、暇无キ楽ヲ七寶ノ(殿)ニ受ケテ、(終ニハ)花台ノ上ニ昇リテ三身ノ仏ト作ラ令メム云。

↑⑤設ケタテマツラレル香花燃燈種々ノ(大御供養)ハ、如来ノ境界ニ約テハ、受ケ取メタマハレルコト、都テ无シトイフトモ、衆生界ヲ慈ビ悲ブガ故ニ、哀(愍)ヲ垂レテ納受シタマフ。 ↑⑥

【解説】(31〜37行)

30行との間に、2～3行分の空白がある。

前章段（六種供養）の続きか。花、焼香、百味、燃灯を奉納し、且（壇）主の過去世の父母または先考先妣（死亡した父母）の追善供養をする文章。

連絡線⑤と⑥は、33行～35行をとばして36～37行を先に読むことを示す。

連絡線⑦で囲まれた部分（33行～34行）は、先考先妣への供養の功德の回向を述べる文で、34行連絡線⑦の後（34行～35行）は、先考先妣の浄土往生と成仏を願う文。⑦の連絡線は、この二つの文の入れ替えを示していると思われる。34行連絡線⑦の後の文には「某浄土」「某仏」とあり、浄土と仏を限定しない汎用性のある文章になっている。

【文意】（31～37行）

私は此の花を仏に奉り、十方に飛ばして仏土の莊嚴としよう。今日、この香の烟けむりを奉り、三千世界に浮かべて、信の使いとしよう。⑤↓、⑥↓

亡くなった父母が次の生を受けた世界に、花を雨と雨降らし、花と散らして云。（天の衣を天の供養として雨降らせよう云）。瓔珞の衣を翻して、百味の供養云。⑦↓

檀主（施主）の過去世の両親（先考先妣）と、三途八難に繋がれ、今も三途を巡る者たちの為に、献花の十種の功德と、奉香の十箇の勝利を受け賜らせませすように。天上の寶聚は自然に集まる。

↑⑦檀主の先考先妣の為に、三世六道を巡る者たちをたちまちに解脱させ、菩薩衆が取り巻く某仏の某浄土に

往生させ、恒常の法樂を七宝の宮殿で受け、遂には蓮華台の上で仏とならしめますように云。

↑⑤ 設け奉られる香花燃燈、種々の大御供養を、如来の悟りの世界では受け取めることは決してないというけれども、衆生の世界を慈しみ悲しむが故に、我々に哀れみを垂れて受け納めたまうのである。↑⑥

【語注】(31～37行)

31 仏土 仏の浄土。

31 莊嚴 美しく飾ること。

31 三千 三千大千世界。千世界の三乗が集まった世界で、一つの仏国土のこと。

32 雨ト雨フラシ、花ト散ラシテ 散華のようす。ここでは「散チラシテ」と訓んでいるが、23行では「散」を「散

オチ葉」と訓んでいる。31～32行は、莊嚴供養の常套表現。「十八の梵衆は天華を雨ふらし、及び雜宝雨ふらす

こと千万種なり。梵摩尼珠の妙瓔珞、衆宝もて嚴飾せる天妙衣、大宝華幢に勝幡を懸け、持して以て牟尼尊を

供養したてまつる。」(『心地観経』卷第一)

32 天ノ衣 天人の衣。

32 翻化ナシテ 翻は、ひるがえす。

32 瓔珞ノ衣 瓔珞は、珠玉や貴金属を糸で編んだ飾り。瓔珞衣は、瓔珞で飾った衣。天人や菩薩などが身につける。

33 且主 「且」は「壇」の略字。施主。法事の主催者。

- 33 過去ノ両親 過去世（前世以前）の両親。
- 33 先考先妣 亡くなった両親。
- 33 羈ケ縻サレ 「羈カケ縻ホタサ」。『東大寺諷誦文稿』で「カク」の仮名書は他に「係カケ」（97行）。
- 33 三途八難 三途は、六道のうち、地獄・餓鬼・畜生の三悪道。八難は、仏に会うことのできない八種の境界（地獄・餓鬼・畜生・長寿天・盲聾瘖啞・世智弁聰・仏前仏後）。
- 34 勝利 すぐれた功德。
- 34 寶聚 おびただしい量の宝。
- 34 患処 患いのあるところ。苦しみの世界。
- 35 暇无キ楽 中田書・『総索引』は「暇」を「假」の誤字としているが、「絶え間ない不変の法樂（悟りのよろこび）」の意に取り、原文のままに訓む。「暇無し」は漢語「無暇」の翻訳語と考えられる（内田賢徳「翻訳語の射程―古事記「心前」、萬葉集「無暇」―」、『萬葉』第二百十六号、二〇一三年十一月参照）。
- 35 七寶 七つの宝。経論により小異がある。「金・銀・瑠璃・砗磲・碼瑙・真珠・玫瑰」（『法華経』受記品）など。
- 63 行、199 行にも再出。
- 35 花台 華台。仏や菩薩衆の乗る台。『梵網経』などに説かれる蓮華台藏世界の世界観では、世界の中心に仏が坐す蓮華台がある。
- 35 三身仏 真如としての永遠の存在の仏と、菩薩の因行が報われて成った仏と、現実界に現れた釈尊などの仏の、三身の仏のこと。諸説あるが、『東大寺諷誦文稿』（384～387行）に見える「法身・応身・化身」の三身は、『金

光明最勝王經』三身品などに説かれている三身説である。三身のうち「法身（法界身）」は『東大寺諷誦文稿』に散見する語である（57行ニヶ所・350・352・384・386行）（拙稿「東大寺諷誦文稿の浄土」〔『成城文芸』第二一九号、二〇一二年六月参照〕）。

36 如来ノ境界ニ約テハ「如来ノ境界」は、如来の悟りの境地。『東大寺諷誦文稿』では、「約」を「限定する」の意で「オキテ」と訓んでいる（中田書第二章第三節参照）。「ニ（格助詞）＋オキ（動詞連用形）＋テ（接続助詞）」を複合の格助詞のように用いる「ニオキテ」は、「〜について、〜にとって」の意。後に音便形「ニオイテ」が多くなる。

37 哀愍 あわれみ、いつくしむこと。

【翻刻】（38～39行）

38 摩納仙人修道時ニハ 七茎之蓮花ヲ奉燃燈仏 花天女カ修法時ニハ三枚金錢ヲ獻五

39 毘波戸仏 以是今日且主

【読み下し文】（38～39行）

摩納仙人ノ修道ノ時ニハ、七（五）茎ノ蓮花ヲ燃灯仏ニ奉リキ。花天女ガ修法ノ時ニハ、三枚ノ金錢ヲ毘波戸仏ニ獻リキ。是ヲ以テ、今日、且主。

【解説】（38～39行）

摩納仙人と花天女の供養の例話を出し、その後、檀主の供養の話題に続いていくものと思われる。

【読み下し文】（38～39行）

摩納仙人の修道の時には、七（五）茎の蓮花を燃灯仏に奉った。花天女の修法の時には、三枚の金銭を毘波戸仏に献った。是を以て、今日、且主は…。

【語注】（38～39行）

38 麻納仙人 摩納仙人のこと。「摩納」は若者の意で、「儒童」とも訳される。釈迦牟尼仏の前生。燃灯仏の世、摩納が仏を供養するために、七茎の蓮華をもつ王家の娘に、五百の銀錢で売ってもらおうとした。女ははじめ五茎の蓮華だけを渡したが、後に二茎も渡した。燃灯仏は摩納が将来仏（釈迦牟尼仏）になると予言した。「七茎」の横に「五」が傍書されているのは、その説話を示している。中田書出典調査参照。

38 燃灯仏 過去に現れた仏。前項参照。

38 花天女 出典未見。

38 三枚 原文「三牧」。239・240行にも「一牧」とする。「枚」を「牧」とするのは、一個人の誤字ではなく、広く使用されたものらしい（中田書釈文注記参照）。

39 毘波戸仏 釈尊以前にこの世にあらわれたという、過去七仏の第一の仏。

【翻刻】（40行）

40 〔某仏ノ平等大悲ハ、不簡貴卑云〕〔宿寶王樹云〕〔沙羅樹云〕

【読み下し文】（40行）

〔某仏ノ平等大悲ハ、貴卑ヲ簡ビタマハズ云。〕

〔宿寶王樹云。〕

〔沙羅樹云。〕

【解説】（40行）

短文と語句の覚え書きのようである。

【語注】（40行）

40 宿寶王樹 不明。「宝樹」は浄土の樹木。「寶王樹に宿る」と読むか。

40 沙羅樹 沙羅双樹。インド原産の喬木。釈迦の入滅の時に、一双ずつの八本の沙羅樹のうち、一双の一本ずつ

が枯れたという仏伝で知られている。

本稿は、成城大学文芸学部特別研究助成による共同研究「日本における伝統と革新をめぐる総合的研究」の成

果である。

